

あとがき

この2年間、世界はCOVID-19の影響を受け、厚生労働省の発表によると2022年年頭の日本の累積死亡者数は18,385人だったという。残念ながら、この数字は今年も増えていくだろう。COVID-19に関わった医療従事者の自殺に代表される精神的負担については、連載の牧野氏の原稿に詳しい。COVID-19禍として生起している様々な事象のどこからが人為災害だろうかと考えるわけだが、今号は<被害者支援>を特集のテーマとした。

阪神・淡路大震災（1995年1月17日）の被災者でもあった高木氏は、発災直後の人々の様を生々しく伝えてくれた。それは凄まじい体験であったわけであるが、氏がその後にJR西日本脱線事故に関わった経験から、自然災害と人為災害の被害者では悲嘆と怒りの様相がかなり異なることに気づいたという。冒頭の中島氏は、臨床上問題となるレベルの精神症状をもつ者が犯罪被害経験のある回答者では18.5%で、犯罪被害経験のない回答者（9.1%）の2倍以上であり、10年以上経過した被害者でも17.5%と、長期にわたって深刻なメンタルヘルスの問題を抱えている実態を紹介してくれた。「世田谷事件」（2000年12月30日）の被害者家族と隣どうして住んでいて、亡くなられた宮澤泰子さんの姉である入江氏は、「サバイバーズ・ギルト」、「自責の念」の背後には不条理への怒りが隠されていて、悲しみからの回復の妨げになることを教えてくれている。身近で大好きだった（愛してほしかった/仲良くしたかった）人（々）が加害者である場合に生じる混乱も深刻である。キタ氏（パートナーからの暴力）、野坂氏（デートDV）は、「加害者と別れば解決」ではない問題の性質や人格へ及ぼす影響の甚大さを教えてくれる。加藤氏（子ども虐待）は、「虐待」は概念であって出来事そのものではないことに注意を喚起し、出来事が織りなす文脈のような中間的な抽象度や課題を総合的にとらえることが肝要であり、「虐待」のみに意識を奪われては支援が半ばであることに警鐘を鳴らした。小平・山口両氏（ネット上のいじめ）は巧妙なネットいじめが増えていることを指摘している。両氏も述べているようにデジタルネイティブな世代ではない我々には理解困難ではあるが、支援をあきらめない。被害者の声を真摯に聴き、さまざまな災害についてていねいに整理することによって、起こっていることの本質の異同を知り、適切な支援を産み出すことができるのではないか。この特集がその一助になれば幸いである。

（上別府 圭子）

無断転載禁止